

予防接種で子宮頸がんを予防しましょう

Q 子宮頸がんってどんな病気？

子宮の入り口にできる女性特有のがんで、ヒトパピローマウイルス(HPV)に感染することで発症します。初期にはまったく症状がなく、気がついたときにはがんが既に進行しているケースもあります。

子宮頸がんと診断される人
約15,000人/年間
子宮頸がんで亡くなる人
約3,500人/年間

Q 中高年がかかる病気じゃないの？

20代~30代での発症が最も多いがんです。

Q 感染したら皆が子宮頸がんになるの？

ヒトパピローマウイルス(HPV)への感染経路は主に**性交渉**です。感染した人の約1%が子宮頸がんを発症するといわれています。また発症までに感染してから5~10年、あるいはそれ以上の時間がかかるといわれています。



Q ワクチンで予防ができるの？

予防ができます。2009年12月から日本でも接種が受けられるようになりました。



Q ワクチンはいつ受ければいいのか？

性交渉を経験する前に接種するのが最も効果的です。
11歳~14歳での接種が推奨されています。

Q 性交渉の経験があるけど、接種しても効果はないの？

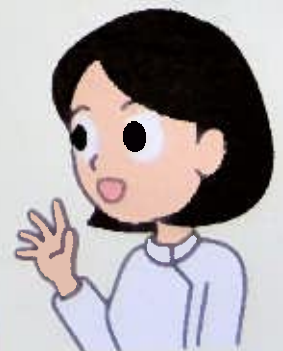
効果はあります。**20歳で約70%、30歳では約50%**、子宮頸がんの発症を防ぐ効果があると推定されています。積極的に接種してください。

Q 副作用はあるの？

「注射した部位の痛みや発疹、腫れ」「軽度の発熱けんたいてん」「倦怠感」「食欲不振」などが一時的に現れることがありますが、通常数日間程度で治ります。

Q ワクチンを接種したら子宮頸がん検診は受けなくてよいの？

現在、ワクチンで防げるのは約70%の子宮頸がんにすぎません。接種したからといって安心せず、定期的に**検診**を受けましょう。



子宮頸がんが気になる

子宮頸がんは早期に見つければ怖い病気ではありませんが、受診率が低いのが現状です。現在は、その原因や過程がほぼ解明されており、がんが発見されても適切な治療で子宮の温存も可能です。乳がんと異なり、自分で気づくことがほとんどないため、定期的ながん検診が非常に重要となります。



● 自覚症状がないのが特徴

子宮頸がんの症状は、不正出血やおりものの増加、性交時出血などがあります。症状があらわれた時は、かなり進行している可能性が高く、子宮を摘出する場合もあるため、女性にとっては心身ともに大きな負担となります。



性交後の出血が多い



出血？

初期症状がほとんどない

不正出血
おりものの増加
異臭
腹痛・腰痛
排尿困難
血尿・血便

● 子宮頸がんの原因はウイルス？

最近の研究で、子宮頸がん患者の多くがHPV（ヒト・パピローマウイルス）に感染していることがわかりました。このウイルスは、性行為により感染し、それ以外で感染することは極めて稀です。



※100種類以上あるヒトパピローマウイルスの中でもハイリスク型の「16型」と「18型」が原因となることが多い

感染からがんの発症まで5～10年以上

● 20歳になったら検診を

子宮頸がん検診の検査法には「細胞診」と「HPV検査」があります。この2つの検査を併用することで、病変の発見率がほぼ100%になり、また将来がんになるリスクがあるかどうか知ることができます。

細胞診

子宮頸部の細胞を採取

がんを疑うような異常な細胞がないかどうかを調べる

HPV検査

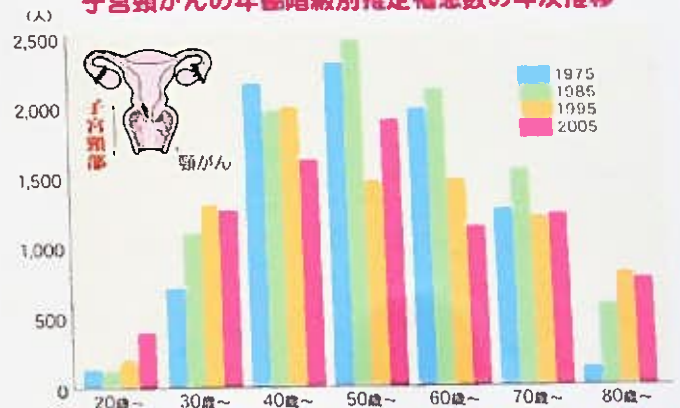
原因となるウイルスに感染していないかどうかを調べる

現在、公的検査にHPV検査を導入している所はわずかです。少しでも気になる方は自治体の窓口や民間の医療機関に問い合わせましょう。

● 若年層に増加している子宮頸がん

子宮頸がんは遺伝などに関係なく、性交経験がある女性なら誰でもなる可能性があります。近年は若年層の発症率が増加傾向にあり、特に20～30代の女性においては、発症する全てのがんの中で第1位となっています。

子宮頸がんの年齢階級別推定罹患数の年次推移



ヘルシーコラム ～HPVと予防ワクチン～

現在、子宮頸がんの原因となるHPV(ヒト・パピローマウイルス)の感染を防ぐワクチンは2種類あり、米国や豪州では、保険未加入の子供や12～26歳の女性が無料で予防接種を受ける制度が導入されています。2009年10月、日本でも厚生労働省に正式承認されました。ただし、ワクチンはHPVの感染を防止するもので、子宮頸がんを治療するものではありません。よって、ワクチンの接種は初交前に接種すると最も効果が高いとされています。アメリカでは11～12歳、イギリスでは12～13歳が対象とされており、初交が欧米より2～3年遅いといわれる日本では、15歳位で接種を受けると効果が高いと考えられます。

20～30代女性がワクチン接種を受けた場合でも、今後の感染を予防する効果はありますが、まずは検診で子宮頸部に異形成が認められないかを定期的に確認することが大切です。

年に1回は必ず受診



(公財) 北海道健康づくり財団